

病弊その二 学習効率の高い時期をみすみす逸する

学習にはすべてそれに適した時期というものがある。その時期を失わずに集中的な学習をさせてこそ能率が上がるが、時期を失ったら、労多くして効少なしということになる。

「わが国の漢字学習は、学習効率の高い時期に学習させないでいて、その時期が過ぎてから学習させている」ことが病弊の二である。

言語学習の上で、三、四歳の時期を“言語の成熟期”と呼んでいるが、いずれの民族の人間でも、三、四歳のこの幼児期に母国語の大要を身につけるものである。もしも何かの理由で、この時期に全く言語に触れないで過ごす、その人間の言語学習能力は極度に衰えてしまい、その後の学習はひどく困難なものになる、と言われている。その最も著しい実例に、狼少女・カマラの例がある。

幼児の言語学習の特徴は、その周囲に雑然と発生される言葉を、覚えようという努力もなしに自然と吸収できるところにある。この時期には、数か国語を同時に学習することもでき、しかもこれらが決して入り混じって混乱することのないことは、古くウェブスターの実験を待つまでもなく、今はその例証が多い。

さて、「漢字は目で見える言葉である」から“視覚言語”とも呼ばれ、漢字は言語の仲間である。だから、「漢字学習の成熟期が幼児期にある」ことは、理論的に考えてみて少しも不思議なことではない。

ところが、文字の発生が、言語の発生より著しく遅れていることと、世の中には、言語のしゃべれない人間はほとんどいないのに対して、文字の読み書きができない人間が多いところから、「文字の学習は、言語の学習に比べて著しくむずかしいものである」という先入観的固定観念をだれもが持っていて、今までこれを疑う者が一人もいなかった。

しかし、事実は全くその反対であることを私は発見し、その証拠もつかんだ。このことは同じころ、アメリカのグレン・ドーマン博士も発見し、証明した。その証拠は、「言葉の覚えられない重度の脳障害児や精薄児が文字を覚えられる」という事実である。

その最も大きな理由は、「言葉は発生するや否や消えてしまうので、これを正しく受け入れ、記憶にとどめることが困難であるが、文字は消えてしまわないで、正しく受け入れて記憶するまで待っていてくれる」ということにあると思うが、基本的には、「視覚的記憶の方が聴覚的記憶よりも強い」ことに拠る。

今まで文盲が多かったのは、言語学習の成熟期にある幼児は、耳から言葉を聞く機会が多いのに対して、その目で文字を見、それを教えてもらうことがまったくなかったからである。どんなやさしいことでも、まったく教えられなければ、絶対に覚えることはできない。覚えられないことがむずかしい、という理由にはならないことを知る必要がある。

重度の脳障害児や精薄児にはかなは覚えられないが、それよりも

むずかしい文字だと考えられていた漢字はよく覚えるのである。それも、“中”よりは“虫”の方が、“虫”よりは“蟻”や“蜂”の方がよく覚えられるのである。

ドーマン博士が、「言葉の覚えられない脳障害児が文字を覚える」ことを発見したと述べたが、その文字は“s”などのアルファベットではなくて“strawberry”というような word だったのである。

今でも一般には「アルファベ. トが覚えられないうちは word など覚えられないはずがない」と考えられていて、欧米の学校ではまずアルファベットを学習させ、それを習得してからでないとい word の学習に進めない。

アルファベットもかなも、単なる音声を表わした文字にすぎないから、子供に、音声分析の意識・興味が発達するまでは教えることができない。教えても関心のないことは記憶にとどまらないからである。

word も漢字も、幼児の関心に訴える内容を持っているから、記憶にとどまるのであるが、同時に、幼児期が機械的記憶に最も優れた時期だからでもある。

ドーマン博士は「五、六歳児にアルファベットを覚えさせることはむずかしいが、一、二歳児に word を覚えさせることはやさしい」と言っているが、私も「五、六歳児にかなを覚えさせるよりも、一、二歳児に漢字を覚えさせる方がやさしい」ことを確認している。

又吉孝旨くんも田中庸介くんも、一歳児で二百から三百字の漢字を

読むということで新聞記事になったが、二人とも半年くらいの間に二百字の漢字を覚えてしまっている。六年生が一年間に学習する漢字が一九〇字しかないのに、全部覚えられない子供の方が多いという事実と比べてみれば、幼児の漢字学習能力がいかに高いかがよくわかるであろう。

ドーマン博士は、「word から先に学習させるという新しい教育法が広く社会に採用されるのには、少なくとも五十年はかかる」と言っているが、それは、「最も記憶力の旺盛な幼児期に、漢字から先に学習させる」という新しい教育法についても同様であろう。

そこで、現在可能な小学校の漢字教育は次のようにすることである。

『小学校の一、二年生の間に、六年間で学習する漢字の半分を提出し学習させる』

一、二年生はまだ完全には幼児期を脱し切っていない。機械的記憶にかけては、六年間で最も得意な時期である。この時期に、七六字とか一四五字という提出の仕方ではもったいない。一、二年生は、五百字でも六百字でも決して驚かない。それどころか、喜んで習得する。私はそれを十四年間にわたって実験し、確かめたのだから間違いはない。